

2026 年度 早稲田大学 スポーツ科学研究科

修士課程 2 年制 一般入試 [秋期] (専門科目) 解答例

論述式問題につき、一般的な解答例は示せないため、解答のポイントを示す。

A. スポーツ文化研究領域

A-1 研究指導名：スポーツ史 (石井 昌幸)

ラテン語のデポルターレ (deportare=運ぶこと) が、古フランス語デポール (déporter=愉しみ) を経て、近世ごろにディスポルト (disport=愉しみ) として英語に入り、「di」が頭音消失してスポーツ (sport) となって、「娯楽・慰み・気晴らし」一般を指す言葉となった。19 世紀には、富裕層が行なう狩猟や競馬などを指す言葉として広く用いられたが、19 世紀後半までにクリケットなど一部の競技をも含むようになり、19 世紀末にはさらに英米で意味範囲が拡大してサッカーや陸上競技、野球など、今日のような競技スポーツを指す用例も見られるようになった。19 世紀末以降、各種スポーツが世界に広まり、オリンピックの影響もあって「スポーツ」が概念として世界各地で知られるようになると、現代のような意味で各種競技の総称としての「スポーツ」という語が一般化した。以上のような流れについて、なるべく多くの具体例を挙げて論述されていることが解答のポイントである。

A-2 研究指導名：舞踊論 (杉山 千鶴)

音楽家の山田耕作 (当時) と後にモダンダンスのパイオニアとなる石井漠らが模索した「舞踊詩」を理解し、これについて、当時の日本における洋舞の状況にも触れながら、適切な用語を用いたり事例を挙げながら論述していること。

A-3 研究指導名：体育科教育学 (吉永 武史)

学習評価の観点に応じて、パフォーマンス評価や学習カード (タブレット端末を活用したデジタルカードを含む) の記録、モニタリング (観察) 評価等の中から適切な評価方法を選択し、具体的に述べていること。

A-4 研究指導名：スポーツ教授学 (深見 英一郎)

1) 近年、国際的に身体活動を促進させる要因の 1 つとして注目されているフィジカルリテラシーは、特に子供・若者の日常的な運動習慣の確立と体力を向上させる上で重要な資質・能力であることに触れられていること。

2) スポーツ教育がどのように、フィジカルリテラシーの向上に寄与するかについて具体的に述べられていること。

A-5 研究指導名：スポーツ社会学（中澤 篤史）

・①～③から 1 つを選択して、その意味を社会学の理論と学説史を踏まえながら適切に説明していること。

・選択した用語を使って、スポーツに関連する任意の社会現象を、社会学の視点から根拠とともに具体的に分析・考察していること。

・日本語で論理的に筋の通った説得的でアカデミックな文章が書けていること。

A-6 研究指導名：スポーツ文化論（川島 浩平）

スポーツ界およびスポーツメディア界では、大規模で行われ、人気のあるスポーツを「メジャースポーツ」、そうでないスポーツを「マイナースポーツ」と分類、区別することがある。この問題は、この「メジャースポーツ」を一つ取り上げ、そのスポーツが「メジャー」としての地位を獲得した理由・原因（起源）、獲得するまでの歴史的経緯（過程）、そしてメジャーとしての現状（現在）を視野にいれ、正確な日本語で、アカデミックライティングの基本技能（パラグラフ・ライティング、トピック・センテンス設定、全体の構成）を用いて、小論文を作成することを目的とする。

解答のポイントは、「メジャー」の定義をしているか（問題の「取り上げ」への応答として）、起源を説明しているか（問題の「なぜ」への応答として）、過程と現在を説明しているか（問題の「いかに」への応答として）、正確な日本語力とアカデミックライティングスキル（問題の「説明しなさい」への応答として）など4点を主とする。

A-7 研究指導名：アジアのスポーツと身体文化（高嶋 航）

「現在」のスポーツが「過去」とは無関係でないこと、アジア諸国間にはさまざまな歴史認識問題があり、それが現実に影響を及ぼしていることを理解し、歴史とスポーツの関係を具体的な事例に基づいて説明できるかを問うた。

B. スポーツビジネス研究領域

B-1 研究指導名：スポーツ経営学（木村 和彦）

スポーツツーリズムを構成する要素（ツーリスト、観光行動、観光対象（サービス、施設）、観光情報など）の視点から、持続可能なスポーツツーリズムについて論じること。

B-2 研究指導名：健康スポーツ論（中村 好男）

- ・ ACP（Advance Care Planning）の意味を理解していること。
- ・ ACP を単なる「延命治療」の話に限定するのではなく「高齢者の生きがい保持（Well-being）」という視点から、その意義と課題について解説すること。
- ・ 本人の価値観を中心としてよりよく生きるためのプロセスを探るという意義、生活者目線の ACP への転換や継続的対話の仕組みが求められているという課題など、本人の価値観を中心とした意義と課題を記述できていることが望まれる。

B-3 研究指導名：トップスポーツビジネス論（平田 竹男）

- ①単に欧州とアメリカ型の昇降格の有無を述べるだけでないこと。
- ②アメリカ型にはサラリーキャップ、レベニューシェア、ドラフト制などの戦力均衡策が存在することを理解していること。
- ③そしてアメリカ型の限界としてサッカー欧州 CL などの国際的競争の存在する競技の中で成り立ちにくい点が押さえられればなおよい。
- ④欧州型は、果てしない競争を余儀なくされクラブ経営の破綻が見られたが、クラブ経営安定のために財政規律を重んじる動きやサラリーキャップが導入されるようになった点が記述できていることが望ましい。

B-4 研究指導名：スポーツ組織論（作野 誠一）

- ・ 地域スポーツクラブの組織形成プロセスについて、モデル（例えば運動過程図式ほか）を適用するなどして分かりやすく説明することができる。
- ・ 同プロセスの各フェーズにおける具体的な支援策について提案することができる。
- ・ 以上の内容について、論理的かつ適切に表現することができる。

B-5 研究指導名：スポーツビジネスマーケティング（松岡 宏高）

- (1) スポーツ消費行動における満足に至るプロセスを適切な用語を用いて説明できていること。
- (2) スポーツマーケターがコントロールできない要因について理解した上で、スポーツ消費者の満足の重要性について論理的に説明できていること。

B-6 研究指導名：スポーツビジネス法（松本 泰介）

スポーツビジネスと法学の論点の 1 つとして、スポーツイベントの中止対応がある。主催者、参加者に責任がある場合は法的検討がしやすいが、不可抗力など双方に責任がない場合にどう対処すべきか、民法の公平なルールを前提としたバランス感覚を問う。

B-7 研究指導名：スポーツ&エンターテインメントマネジメント（佐藤 晋太郎）

企業スポーツの概要（研究文脈）を理解しつつ、問われている課題に対して論理的に研究デザインを説明できること。特に以下の 2 点は明確に記載できていることが望ましい。

- (1) 明らかにしようとする問いは何か
- (2) そのためにどのような方法を用いるか

B-8 研究指導名：スポーツプロモーション論（高橋 義雄）

・今回、14 年の時を経てスポーツ基本法の改正が必要となった社会的・文化的変化についての的確に論じることができること。

・社会的背景の変化に伴い改正されたスポーツ基本法の改正内容を正確に理解していること。

・以上の 2 点を論理的に記述できること。

B-9 研究指導名：スポーツ経営戦略（大井 義洋）

スポーツ競技団体やチームが実際に行っている具体的な戦略事例を挙げ、それを基に自分の考えを論理的に述べること。

例として、以下の観点から論じることが望ましい。

- ・スポーツ競技団体やチームにおける差別化戦略の具体的事例
- ・チケットやスポンサー以外の収益源を確保するための収益多角化戦略の具体的事例
- ・地域密着戦略の具体的な取り組み事例

C. スポーツ医科学研究領域

C-1 研究指導名：運動免疫学（赤間 高雄）

運動は上気道感染症の罹患しやすさに影響を与えるが、実施した運動の状態によって影響が異なる。運動の実施期間を一過性運動と継続性トレーニングとに分けて、それぞれの運動の量や強度が適切な場合と過剰な場合とについて、上気道感染症の罹患のしやすさに与える影響を説明する。さらに、そのメカニズムとして、運動による免疫機能の変化について具体的な免疫指標を例示して説明する。

C-2 研究指導名：健康行動科学（岡 浩一郎）

- ・日本の代表的な成人を対象に行われた調査データに基づき、成人の歩数が年々減り続けていることや、そもそも運動習慣者が少ないこと、さらには長時間座っている成人が多いことなどへの言及があると良い
- ・身体活動不足や座りすぎが、様々ながん（たとえば、大腸がん、女性の乳がん、男性の前立腺がんなど）の罹患リスクや死亡リスクを高めていることについて、観察研究（前向きコホート研究など）の結果を踏まえて解説できていることが望ましい
- ・身体活動不足・座りすぎ解消のための介入研究（ランダム化比較試験など）の成果の紹介があっても良い
- ・観察研究や介入研究のまとめ（システマティックレビューやメタアナリシス、アンブレラレビュー）による成果に言及できていれば、なお望ましい

C-3 研究指導名：スポーツ整形外科学（金岡 恒治）

腰椎伸展動作の繰り返しによって、成長期であれば腰椎分離症が、それ以後であれば腰椎椎間関節障害や棘突起のインピンジメント障害仙腸関節障害などが生じる。対処方法は腰椎の局所的な伸展動作が生じないように、体幹筋賦活化、胸椎・胸郭、股関節の伸展可動性獲得などが求められる。

C-4 研究指導名：予防医学（鈴木 克彦）

サルコペニアは、加齢性筋肉減弱症という別名もあるが、主に高齢者に生じる骨格筋の減少や筋力低下をさし、廃用性筋萎縮などとは異なる。自立した生活に支障をきたすため、その予防は重要である。骨格筋は合成と分解のバランスで維持されているが、合成が低下したり分解が亢進すると筋萎縮につながり、複数のメカニズムが存在する。予防対策のなかで運動トレーニングや栄養が重要視されており、少なくとも運動の効果と機序について科学的に論述できることが望ましい。

C-5 研究指導名：アスレティックトレーニング（広瀬 統一）

アスレティックトレーニング学の基礎理論と知識に基づき、設定された課題に対して適切に自身の考察を論じられているか。

C-6 研究指導名：筋生物学（秋本 崇之）

細胞成分と人工材料の特性や生体適合性を正しく理解し、適切な用語を用いて論述していること。

C-7 研究指導名：運動代謝学（宮下 政司）

中枢と末梢を関連づけて論じて、食欲を抑制的および促進的な視点で生理的メカニズムを交えて論じているかを評価する。

C-8 研究指導名：運動器スポーツ機能解剖学（熊井 司）

・運動器に発生する代表的なスポーツ障害に関する設問に対し、設問内容を正しく理解し、適切な用語（与えられたキーワードを含む）を用いて論理的に説明（解答）がなされているかについて評価を行う。

・運動器機能解剖学的な視点から、問われている疾患についての病態、治療、予防法について、その根拠とともに具体的に述べられているかについて評価を行う。

C-9 研究指導名：健康教育学（石井 香織）

身体活動推進のために適した健康教育学分野における理論を示し、その理論について適切に説明し、子どもを対象とし応用しているかが解答のポイントである。

C-10 研究指導名：スポーツ神経精神医学（西多 昌規）

睡眠科学の基礎に基づいて、睡眠構造について脳波所見をもとに、適切に説明されているかがポイントとなる。ノンレム睡眠は段階的に深睡眠へ移行し脳・身体の回復に寄与し、レム睡眠は脳活動が高まり情動処理や記憶統合に関与する。睡眠評価は睡眠ポリグラフが基準であり、詳細測定可能だが負担が大きい。アクチグラフは簡便だが精度には限界がある。

C-11 研究指導名：スポーツ疫学（澤田 亨）

以下の点を評価のポイントとする。

1. ヒト集団を対象に実施する疫学研究において、考慮すべき重要な系統誤差である「選択バイアス」について理解していること。
2. 「情報バイアス」について理解していること。

C-12 研究指導名：アスレティックパフォーマンス（平山 邦明）

ストレンクス&コンディショニングとその基礎学問の一つであるバイオメカニクスの知識に基づき、設定された課題に対して論理的に解答を導いているか。

C-13 研究指導名：環境運動生理学（細川 由梨）

酷暑環境下における人の体温調節メカニズムについて理解した上で、既存の暑熱耐性試験が一律の判定基準を設けていることの限界について、具体的に論述されていること。

C-14 研究指導名：スポーツ生化学・遺伝学（谷澤 薫平）

1. 運動により分泌が促進されるエクサカインを1つ挙げること。
2. ①で挙げたエクサカインを分泌する臓器・組織名を示すこと。
3. ①で挙げたエクサカインが作用する臓器・組織名を示すこと。
4. ①で挙げたエクサカインの主な生理作用とその作用メカニズムを説明すること。
5. ①で挙げたエクサカインの健康増進・疾病予防における役割を説明すること。

C-15 研究指導名：スポーツ生理学（前田 清司）

持久的トレーニングを行うと安静時心拍数が低下する。これは主に心臓や自律神経系などの適応によるものである。これらの観点から、持久系アスリートの安静時心拍数が非鍛練者より低い理由を説明することが評価のポイントとなる。

C-16 研究指導名：応用生理学（宮地 元彦）

エアロビクトレーニングとレジスタンストレーニングは用いられる活動筋に対し特異的な適応をもたらす。これらの違いについて筋の肥大などのマクロな形態や、筋細胞を構成する細胞小器官の変化などのミクロな形態の変化に関する記述が求められる。また、エアロビクトレーニングは、有酸素性代謝を主要なエネルギー供給系とし、レジスタンストレーニングは無酸素性代謝を主要なエネルギー供給系として用いるため、活動筋の酸素利用能やエネルギー供給系を構成する代謝酵素の活性や発現量などの変化の特徴や違いを生理・生化学的視点から述べるのが評価のポイントとなる。

C-17 研究指導名：ハイパフォーマンス科学（宮本 直和）

修正不可能な要因（肉離れ既往歴、年齢など）と修正可能な要因（伸張性筋力、筋束長など）を正確に区別し、それぞれ具体例を挙げて説明していること。また、挙げた各リスク要因について、エビデンスレベルの違い、特に既往歴や年齢が強固なエビデンスを有する点を論述していること。

D. 身体運動科学研究領域

D-1 研究指導名：生体ダイナミクス（川上 泰雄）

筋骨格系に含まれる種々構造を指摘し、それらがどのように関係し合いながら身体運動を生み出すかについて論述していること。解剖学に関する知識や適切な用語の使用、「身体運動」の正確な定義とそれに基づいた記述が求められる。

D-2 研究指導名：スポーツ心理学（正木 宏明）

スポーツにおける「あがり」現象と関係の深い性格特性として、不安特性、神経症傾向、内向性、完全主義傾向、等を挙げたうえで、過去の研究知見に基づきそれぞれの関与について説明していること。そのうえで、スポーツ現場で実践されてきたあがり対処法や基礎研究で検証されてきたあがり防止法について、それぞれの特長や課題等に触れながら説明していること。

D-3 研究指導名：統合運動神経生理学（宝田 雄大）

A. 本設問では、筋力増強を目的としたトレーニングにおいて筋に与えられる刺激とその役割について論じることを求める。

答案作成にあたり、以下の3点を押さえているとよい。

- ・機械的ストレス：筋線維への直接的負荷とその効果
- ・代謝的ストレス：代謝産物の蓄積と筋肥大への寄与
- ・神経適応：運動単位の動員や同期化による筋力向上

B. 本設問では、血流制限下（加圧）トレーニングにおける努力感増大の要因を、運動指令との関連で論じることを求める。

答案作成にあたり、以下の3点を押さえているとよい。

- ・運動指令の増大：同じ力発揮でも中枢指令が強まること
- ・代謝産物による求心性入力：III・IV群線維の刺激と努力感増大
- ・高閾値運動単位の動員：低負荷でもII型線維が動員されること

D-4 研究指導名：バイオメカニクス（矢内 利政）

運動の法則を正しく理解し、適切な座標系を用いて運動の力学的因果関係を説明していること。

D-5 研究指導名：スポーツ栄養学（田口 素子）

それぞれが示しているものの違いについて正しく理解し、適切な語句を用いて記述していること。

D-6 研究指導名：運動生理学（林 直亨）

二酸化炭素のホメオスタシスを中心として，安静時および運動時の生理メカニズムを化学的・神経的な観点から論述すること。

E. コーチング科学研究領域

E-1 研究指導名：走運動・コーチング科学（磯 繁雄）

○類似点と特異点

類似点は、2H から 5H までの時間増大。特異点は、スタートから 2H までの所要時間の違い。

○コーチング計画とその要点

スタートからの所要時間を短縮する走能力とハードル技術を高める。

または、ハードル間の所要時間の増大を極力少なくするハードル間の走りとハードル技術の向上

E-2 研究指導名：トップスポーツコーチング（奥野 景介）

ハイパフォーマンスを獲得するためのプロセスをパスウェイの概念を用いて説明すること。

E-3 研究指導名：スポーツコーチング学（土屋 純）

スポーツ運動学でいう運動学習の初期段階にある学習者の特徴を理解したうえで、学習者に対するコーチング、特に教示と示範の方法とその注意点について、具体的に記述していること。

E-4 研究指導名：コーチングとこころの科学（堀野 博幸）

コーチングに携わる際に、関わるすべての人々の「メンタルヘルス」が重要となる。なぜなら、コーチングでは、プレーヤーの自己認識を深め、目標設定とその達成の中で、彼らの成長を支援していく。スポーツでは結果が明示されることも多く、必ずしも設定した目標が達成されるとは限らない。そのプロセスでのストレス管理は重要であり、具体的な対処策を事前に準備しておくことが必要である。

E-5 研究指導名：トレーニング科学（岡田 純一）

現場での実践を科学的に説明するあるいは、科学的知見を実践場面でどのように活用していくのかなど、トレーニングに関する科学的基礎知識の応用力を求めている。

E-6 研究指導名：チームスポーツコーチング論（松井 泰二）

技術・戦術・戦略の用語の違いについての理解していること。

さらには、チームスポーツにおいて技術・戦略ではなく、チーム戦術について、用語の性質を理解したうえで具体例を用いながら説明できること。

E-7 研究指導名：武道のコーチング学（射手矢 岬）

<出題意図>

対人格闘技では筋力や持久力などの体力面からの出力は大切であるが、局面によっては脱力が重視されることがある。

武道や格闘技の実践者が、運動感覚として持っている脱力についての経験知や暗黙知を専門知識を交えながら言語化できるかどうか、その思考力をみる。

<解答のポイントあるいは評価のポイント>

経験のレベルでよいので脱力の必要性を具体的に述べていること。次に、脱力の効果について述べていること。例えば、素早い動作のため、動作の緩急のため、相手の脱力を誘うためなどが記述されていて、自分の考えを論理的に述べていること。例えば、動作中の膝の抜き、随意収縮中にみられるサイレントピリオド、などについて触れてもよい。

E-8 研究指導名：冬季スポーツコーチング学（藤田 善也）

- ・選択した冬季スポーツのパフォーマンスに基づき関連する運動技能を説明できていること。
- ・先行研究等に基づき、運動技能を測定・評価するための具体的な方法が理解できていること。
- ・得られた結果をもとにして、運動技能を習熟させる練習方法を具体的に説明できること。

※お問い合わせいただいた内容は本学において確認いたしますが、個別の回答は行っておりませんので、ご了承ください。解答や得点に影響があると判断した場合は、入学センター Web サイトに掲載いたします。

以上

お問い合わせ先：早稲田大学入学センター

nyusi@list.waseda.jp